

## 新しいいのちへの適応; 本質は行いに表れる (パート 2) ガラテヤ 6:7-10

1. 「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。(ガラテヤ 6:7-8)」
  - a. 私たちが神以外のものや肉を満足させるものに栄光を帰すと破壊的なものを刈り取る結果になる。
  - b. 「蒔く」とは私たちが資源や資産をどこに投資するか、ということである。資源とはお金、時間、エネルギーなどで、どこに何を投資するかで何を刈り取るかが決定する。
  - c. 私たちは義とされたからといってすべての人が栄光を受けるわけではない。
  
2. 「善を行うのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行いましょ。 (ガラテヤ 6:9-10)」
  - a. この時代が過ぎ去ると私たちはみな神のさばきの座に着く。ここでは栄光の冠や王座を受ける者、あるいはやっとの思いで免れる者がいる (2 コリント 5:10)。
  - b. 時が来るまでにあきらめてしまったため「刈り取り」を逃してしまったクリスチャンも多くいる。やめさせようとするサタンからの誘惑はほとんどの場合神の時よりも先に来る。
  - c. 善を行うのは時として疲れる。また時には迫害に耐えなくてはならない。疲れた時や苦しい時、それが罪から来るのか善から来るのか見極めることが大切。時には罪を悔い改めることによって必要以上の苦しみや迫害を避けることができる。ただし時によって苦しみや迫害は神様から来るもので、それを避けようとするのが肉のために蒔いたり十字架を捨てたりイエス様を否定することになる。